

【プレゼンテーション資料】

**2016年度第1四半期 連結業績 および
ソニー生命の2016年6月末MCEV**

ソニーフィナンシャルホールディングス株式会社
2016年8月10日

Sony Financial Holdings Inc. All Rights Reserved

<ネットカンファレンス(電話会議) による決算説明会>

日時 : 2016年8月10日 (水) 16:00~17:00

内容 : 「2016年度第1四半期 連結決算説明会」

発表者: ソニーフィナンシャルホールディングス
常務取締役 清宮 裕晶

ソニーフィナンシャルホールディングス
清宮 でございます。

ただ今より、お手元のプレゼンテーション資料に沿って、当社グループの
2016年度 第1四半期 連結業績についてご説明いたします。

スライド4をご覧ください。

■ 2016年度第1四半期 連結業績	P.3
■ 2016年度 連結業績予想	P.28
■ ソニー生命の2016年6月末MCEVおよびESR	P.30
■ 参考情報	P.38

免責事項

このプレゼンテーション資料に記載されている、ソニーフィナンシャルグループの現在の計画、見通し、戦略、確信などのうち、過去の事実でないものは、将来の業績に関する見通しや試算です。将来の業績に関する見通しは、将来の営業活動や業績、出来事・状況に関する説明における「確信」、「期待」、「計画」、「戦略」、「見込み」、「想定」、「予測」、「予想」、「目的」、「意図」、「可能性」やその類義語を用いたものに限定されません。口頭または書面による見通し情報は、広く一般に開示される他の媒体にも度々含まれる可能性があります。これらの見通しまたは試算に関する情報は、現在入手可能な情報から得られたソニーフィナンシャルグループの経営者の仮定、決定ならびに判断に基づいています。実際の業績は、多くの重要なリスクや不確実な要素により、これら業績見通しと大きく異なる結果となりうるため、これら業績見通しのみで全面的に依拠することは控えるようお願いします。また、新たな情報、将来の事象、その他の結果にかかわらず、ソニーフィナンシャルグループが将来の見通しや試算を見直して改訂するとは限りません。ソニーフィナンシャルグループはそのような義務を負いません。また、このプレゼンテーション資料は日本国内外を問わずいかなる投資勧誘またはそれに類する行為のために作成されたものでもありません。

※本資料掲載情報は、特に記載のない限り、数値は表示単位未満は切捨て、比率や増減率は四捨五入で表示しています。

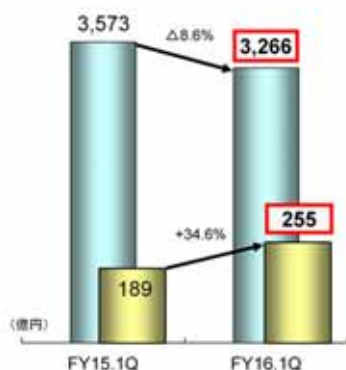
また、増減率が1,000%を超える場合や比較対象の一方もしくは両方がマイナスの場合は「-」表示しています。

※「ライフプランナー」はソニー生命の登録商標です。

2016年度第1四半期 連結業績

連結業績ハイライト①

□ 連結経常収益 □ 連結経常利益



(億円)		FY15.1Q	FY16.1Q	前年同期比	
生命保険事業	経常収益	3,239	2,920	Δ318	Δ9.8%
	経常利益	149	220	+71	+47.7%
損害保険事業	経常収益	247	260	+12	+5.2%
	経常利益	21	28	+7	+35.0%
銀行事業	経常収益	93	92	Δ1	Δ1.3%
	経常利益	18	7	Δ10	Δ58.6%
その他(※1)	経常収益	Δ7	Δ7	+0	—
	経常利益	0	Δ1	Δ2	—
グループ連結	経常収益	3,573	3,266	Δ306	Δ8.6%
	経常利益	189	255	+65	+34.6%
	親会社株主に帰属する四半期純利益	128	176	+48	+37.6%

(※1) 主として持株会社(連結財務諸表提出会社)に係る損益。なお、FY16.1Qより介護事業を含む。
(※2) 包括利益: FY15.1Q…54億円、FY16.1Q…304億円

(億円)		16.3末	16.6末	前年度末比	
グループ連結	純資産	6,043	6,101	+57	+1.0%
	総資産	103,521	104,270	+749	+0.7%

まず、当社グループの連結業績についてご説明いたします。

連結経常収益は、生命保険事業において減少、損害保険事業において増加、銀行事業において横ばいとなった結果、前年同期に比べ8.6%減少の3,266億円、連結経常利益は、生命保険事業および損害保険事業において増加、銀行事業において減少した結果、前年同期に比べ34.6%増加の255億円となりました。

親会社株主に帰属する四半期純利益は、経常利益が増加したことにより、前年同期に比べ37.6%増加の176億円となりました。

スライド6をご覧ください。

連結業績ハイライト②

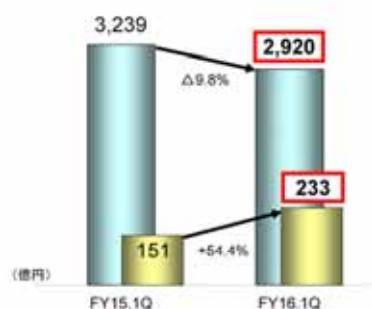
＜前年同期比分析＞

- 生命保険事業:保有契約高が堅調に推移したものの、一時払保険料が減少したことにより保険料等収入が減少したことや、市場環境悪化の影響を受け特別勘定資産運用益が運用損に転じたことにより、経常収益は前年同期に比べ減少。経常利益は、新契約獲得にともなう変額保険の最低保証に係る責任準備金繰入額が大きく減少したこと、および保険金支払額が減少したことにより、前年同期に比べ増加。
- 損害保険事業:主力の自動車保険を中心に正味収入保険料が増加したことに加え、有価証券売却益が増加したことにより、経常収益、経常利益ともに前年同期に比べ増加。
- 銀行事業:好調な住宅ローン残高の積み上がりにより貸出金利息が増加したものの、有価証券利息配当金が減少したことなどにより、経常収益は前年同期に比べ横ばい。経常利益は、主にカードローンに係る広告宣伝費など営業経費が増加したことにより、前年同期に比べ大幅に減少。
- 連結経常収益は、生命保険事業において減少、損害保険事業において増加、銀行事業において横ばいとなった結果、3,266億円(前年同期比8.6%減)。経常利益は、生命保険事業および損害保険事業において増加、銀行事業において減少した結果、255億円(前年同期比34.6%増)。親会社株主に帰属する四半期純利益は、経常利益が増加したことにより、176億円(前年同期比37.6%増)

ソニー生命 業績ハイライト(単体)



□ 経常収益 □ 経常利益



- ◆ 前年同期比 経常収益は減少、経常利益は増加。
- ◆ 保険料等収入は、一時払保険料の減少を受け、減少。
- ◆ 資産運用収益は、市場環境悪化の影響を受け、特別勘定資産運用益が運用損に転じたことにより、減少。
- ◆ 経常利益は、前年同期比で増益。これは、新契約獲得にともなう変額保険の最低保証に係る責任準備金繰入額が大きく減少したこと、および保険金支払額が減少したことによる。

	(億円)	FY15.1Q	FY16.1Q	前年同期比	
経常収益		3,239	2,920	△318	△9.8%
保険料等収入		2,545	2,411	△134	△5.3%
資産運用収益		677	468	△208	△30.9%
うち利息及び配当金等収入		353	359	+5	+1.7%
うち金融の信託運用益		31	11	△20	△64.5%
うち有価証券売却益		36	9	△27	△74.7%
うち金融派生商品収益		—	88	+88	—
うち特別勘定資産運用益		247	—	△247	△100.0%
経常費用		3,087	2,886	△401	△13.0%
保険金等支払金		913	856	△57	△6.3%
責任準備金等繰入額		1,787	939	△827	△46.8%
資産運用費用		40	487	+447	—
うち金融派生商品費用		20	—	△20	△100.0%
うち特別勘定資産運用損		—	439	+439	—
事業費		306	337	+30	+10.1%
経常利益		151	233	+82	+54.4%
四半期純利益		102	166	+64	+62.6%
	(億円)	16.3末	16.6末	前年度末比	
有価証券高		72,733	73,370	+636	+0.9%
責任準備金残高		73,365	74,305	+939	+1.3%
純資産		4,821	4,991	+169	+3.5%
その他有価証券評価差額金		1,506	1,641	+135	+9.0%
総資産		80,354	81,365	+951	+1.2%
特別勘定資産		8,503	8,319	△183	△2.2%

Sony Financial Holdings Inc. All Rights Reserved

6

ソニー生命の業績のハイライトをご説明いたします。

経常収益は、保有契約高が堅調に推移したものの、一時払保険料が減少したことにより保険料等収入が減少したことや、市場環境悪化の影響を受け特別勘定資産運用益が運用損に転じたことにより、前年同期に比べ9.8%減少の2,920億円となりました。

経常利益は、前年同期に比べ54.4%増加の233億円となりました。これは新契約獲得にともなう変額保険の最低保証に係る責任準備金繰入額が大きく減少したこと、および保険金支払額が減少したことによるものです。

四半期純利益は、前年同期に比べ62.6%増加の166億円となりました。

スライド7では、ソニー生命の主要業績指標を記載しております。
続きまして、スライド8をご覧ください。

ソニー生命 主要業績指標(単体)



(億円)	FY15.1Q	FY16.1Q	増減率
新契約高	13,242	12,600	△4.9%
解約・失効高	4,950	4,798	△3.1%
解約・失効率	1.21%	1.11%	△0.1pt
保有契約高	416,096	436,342	+4.9%
新契約年換算保険料	223	205	△8.2%
うち第三分野	39	41	+5.9%
保有契約年換算保険料	7,476	7,908	+5.8%
うち第三分野	1,748	1,822	+4.2%

(注)新契約高、解約・失効高、解約・失効率、保有契約高、新契約年換算保険料、保有契約年換算保険料は、個人保険と個人年金保険の合計。解約・失効率は、契約高の減額または増額および償還を含めない解約・失効高を年度始の保有契約高で割した率。

<主な増減要因>

◆米ドル建保険の販売が好調であったものの、変額保険の販売減少により、減少。

◆定期保険、米ドル建保険の販売が好調であったものの、変額保険および学資保険の販売減少により、減少。

(億円)	FY15.1Q	FY16.1Q	増減率
資産運用損益(一般勘定)	389	419	+7.9%
基礎利益	133	140	+5.4%
順ざや額	41	32	△22.0%

◆基礎利益は、順ざや額の減少や、市場悪化にともなう変額保険の最低保証に係る責任準備金繰入額の増加があったものの、保険金支払額の減少により、前年同期に比べ、増加。

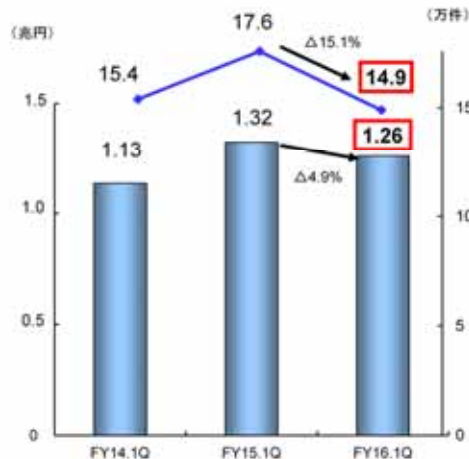
ただし、経常利益においては、この市場悪化にともなう変額保険の最低保証に係る減益影響はキャピタル損益に含まれるヘッジ益により相殺。

	16.3末	16.6末	前年度末比
単体 ソルベンシー・マージン比率	2,722.8%	2,831.3%	+108.5pt

ソニー生命の業績(単体)①

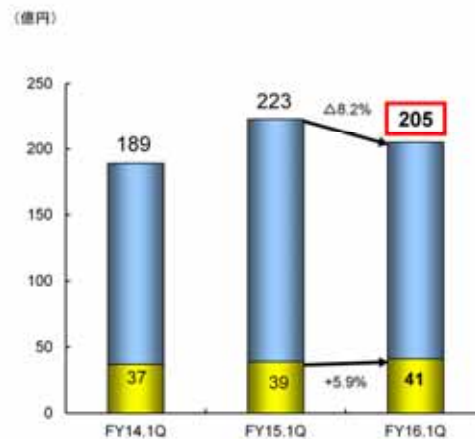
新契約高・件数 (個人保険+個人年金保険)

■ 新契約高 ■ 新契約件数



新契約年換算保険料 (個人保険+個人年金保険)

■ 新契約年換算保険料 ■ うち、第三分野



(左側のグラフ)

棒グラフで示しております新契約高は、米ドル建保険の販売が好調であったものの、変額保険の販売減少により、前年同期に比べ4.9%減少の1兆2,600億円となりました。

また、折れ線グラフで示しております新契約件数は、前年同期に比べ15.1%減少の14万9千件となりました。

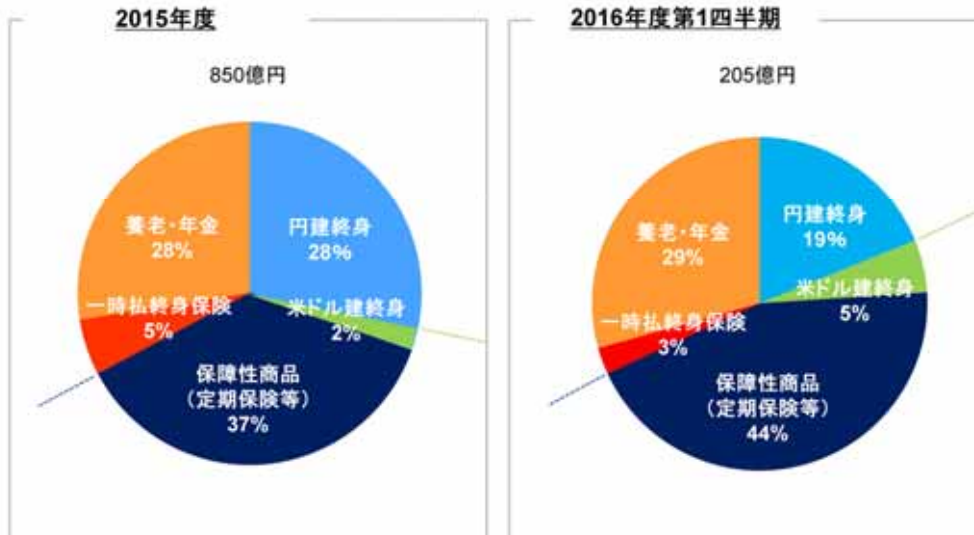
(右側のグラフ)

新契約年換算保険料は、定期保険、米ドル建保険の販売が好調であったものの、変額保険および学資保険の販売減少により、前年同期に比べ8.2%減少の205億円となりました。

このうち第三分野は、前年同期に比べ5.9%増加の41億円となりました。

スライド9をご覧ください。

商品種類別新契約年換算保険料



この円グラフはソニー生命の新契約年換算保険料の商品構成となります。

(右側のグラフ)

低金利環境下において、米ドル建終身および定期保険の提案力の強化を進めてまいりました。

第1四半期では、米ドル建終身は5%、定期保険を含む保障性商品は44%となり、着実に商品構成のシフトが進んでいます。

次のスライドをご覧ください。

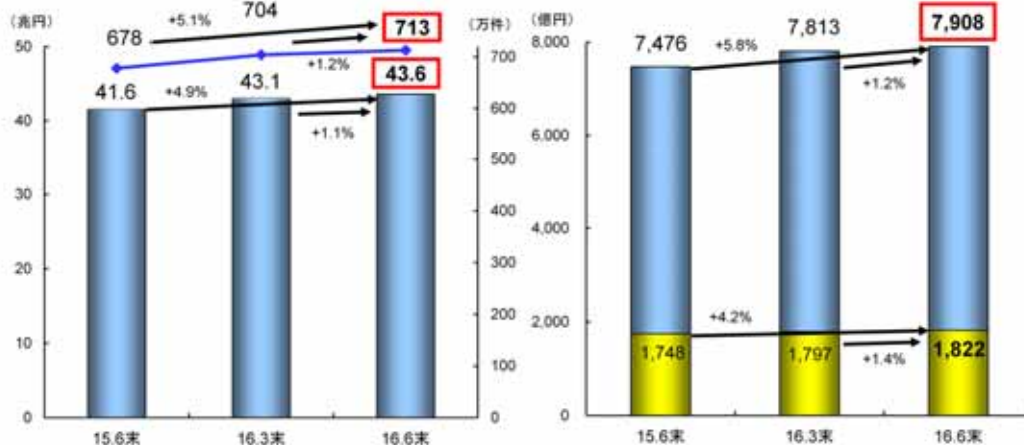
ソニー生命の業績(単体) ②

保有契約高・件数 (個人保険+個人年金保険)

保有契約年換算保険料 (個人保険+個人年金保険)

■ 保有契約高 — 保有契約件数

■ 保有契約年換算保険料 ■ うち、第三分野



新契約および解約・失効等を織り込んだ保有契約の状況についてご説明いたします。

(左側のグラフ)

棒グラフで示しております保有契約高は堅調に推移し、前年同期末に比べ4.9%増加の43兆6千億円となりました。

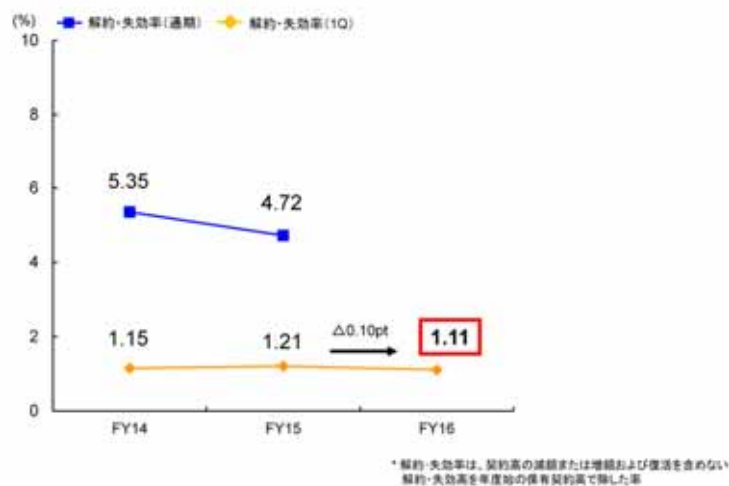
折れ線グラフで示しております保有契約件数は、前年同期末に比べ5.1%増加の713万件となりました。

(右側のグラフ)

保有契約年換算保険料は前年同期末に比べ5.8%増加の7,908億円となりました。このうち第三分野は、前年同期末に比べ4.2%増加の1,822億円となりました。

スライド11をご覧ください。

解約・失効率* (個人保険+個人年金保険)



解約・失効率は、前年同期に比べて0.10ポイント低下の1.11%となりました。

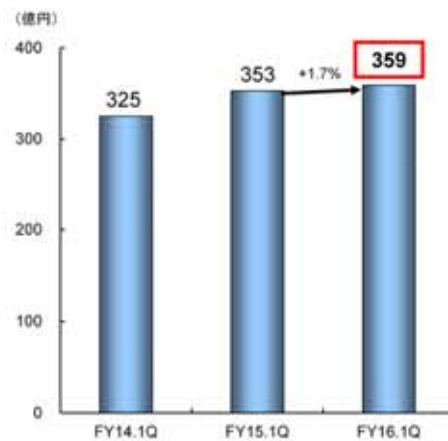
続きまして、スライド12をご覧ください。

ソニー生命の業績(単体) ④

保険料等収入



利息及び配当金等収入



(左側のグラフ)

保険料等収入は、変額年金、変額保険の一時払ならびに一時払終身保険(無告知型)の保険料の減少を受け、前年同期に比べ5.3%減少の2,411億円となりました。

(右側のグラフ)

業容拡大により運用資産は拡大しましたが、前年同期のプライベートエクイティファンドの株式上場益の分配による増益影響が剥落したため、利息及び配当金等収入は、前年同期に比べ1.7%増加の359億円にとどまりました。

次のスライド13をご覧ください。

ソニー生命の業績(単体) ⑤



(左側のグラフ)

基礎利益は、順ざや額の減少や、市場悪化にともなう変額保険の最低保証に係る責任準備金繰入額の増加があったものの、保険金支払額の減少により、前年同期に比べ、5.4%増加の140億円となりました。

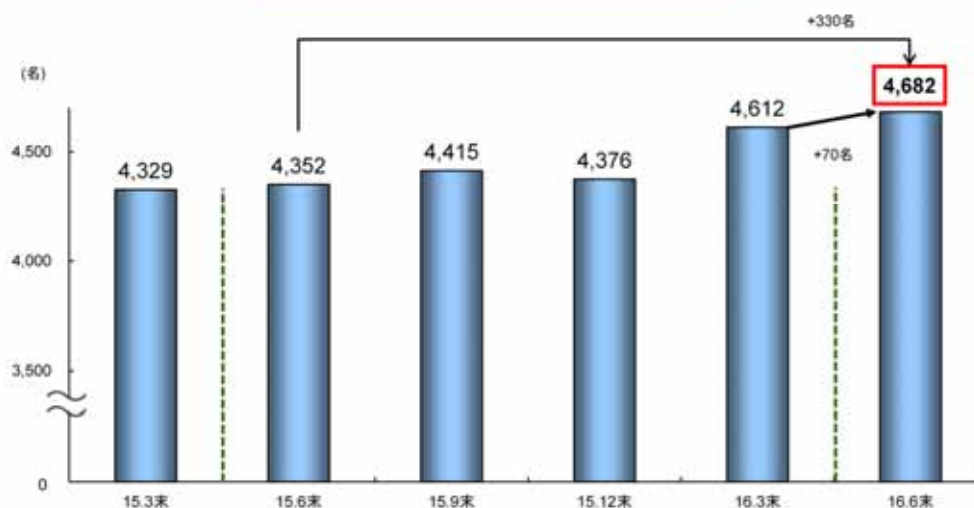
(右側のグラフ)

経常利益は、前年同期に比べ、54.4%増加の233億円となりました。市場変動にともなう変額保険の最低保証に係る責任準備金繰入額の変動は、キャピタル損益に含まれるヘッジ損益と相殺します。

ヘッジ損益を通算した変額保険の最低保証に係る損益は、新契約獲得にともなう責任準備金繰入額の減少により、前年同期に比べ46億円改善しました。保険金支払額の減少とあわせ、経常利益の増加要因となりました。

次のスライド14をご覧ください。

ライフプランナー在籍数



ライフプランナー在籍数は、前年度末から70名、前年同期末から330名増加し、4,682名となりました。

ライフプランナーの採用を担う営業所長登用の積極化など、これまでの採用強化策が奏功し、陣容は着実に増加しています。

スライド15をご覧ください。

一般勘定資産の内訳

(億円)	16.3末		16.6末	
	金額	割合	金額	割合
公社債	63,511	88.4%	64,538	88.4%
株式	333	0.5%	333	0.5%
外国公社債	701	1.0%	596	0.8%
外国株式等	230	0.3%	207	0.3%
金銭の信託	2,809	3.9%	2,831	3.9%
約款貸付	1,716	2.4%	1,729	2.4%
不動産 ^(注)	1,158	1.6%	1,154	1.6%
現預金・コールローン	525	0.7%	446	0.6%
その他	864	1.2%	1,147	1.6%
合計	71,850	100.0%	72,986	100.0%

(注)「不動産」については、土地・建物・建設仮勘定を合計した金額を計上しています。

<資産運用状況>

金利リスクの低減を目的として、保険契約の持つ長期の負債特性に合わせて超長期債の購入を継続



〔債券のDuration〕

2015. 3末 20.3 年

2016. 3末 21.8 年

2016. 6末 22.4 年

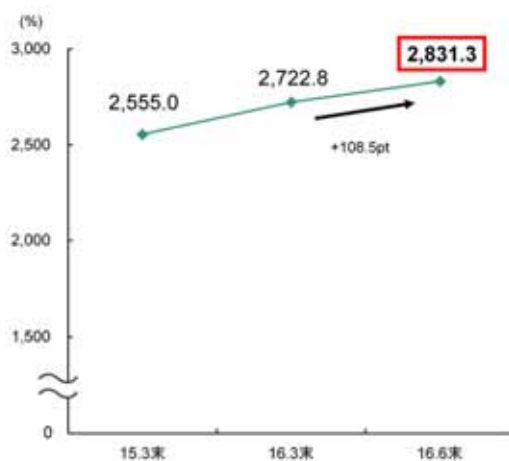
- 「金銭の信託」は主に公社債を中心に運用。
- 一般勘定資産における公社債(金銭の信託で運用されているものを含む)の実質的な構成比
2016.6末・・・92.3% (2016.3末・・・92.3%)

前年度末と比較した、2016年6月末の一般勘定資産の内訳はご覧のとおりです。

マイナス金利の環境下において、超長期の財投機関債や社債への投資を進めてまいりました。

次のスライド16をご覧ください。

単体ソルベンシー・マージン比率



単体ソルベンシー・マージン比率は、前年度末から108.5ポイント増加の2,831.3%となり引き続き高い水準を維持しております。

次のスライド17からソニー損保の業績についてご説明いたします。

ソニー損保 業績ハイライト



◆ 前年同期比 増収増益。主力の自動車保険を中心に、正味収入保険料が増加したことに加え、有価証券売却益が増加したことにより、経常収益、経常利益とも増加。

(億円)	FY15.1Q	FY16.1Q	前年同期比	
経常収益	247	260	+12	+5.2%
保険引受収益	244	250	+6	+2.6%
資産運用収益	3	9	+6	+205.4%
経常費用	226	231	+5	+2.4%
保険引受費用	165	170	+4	+2.6%
資産運用費用	0	—	△0	△100.0%
営業費及び一般管理費	60	61	+1	+1.9%
経常利益	21	28	+7	+35.0%
四半期純利益	14	20	+5	+37.8%

(億円)	16.3末	16.6末	前年度末比	
責任準備金残高	957	986	+29	+3.1%
純資産	283	283	+0	+0.3%
総資産	1,723	1,739	+16	+1.0%

ソニー損保の経常収益は、主力の自動車保険を中心に正味収入保険料が増加したことに加え、有価証券売却益が増加したことにより、前年同期に比べ5.2%増加の260億円となりました。

経常利益は、前年同期に比べ35.0%増加の28億円となりました。

四半期純利益は、前年同期比37.8%増加の20億円となりました。

スライド18、19では、ソニー損保の主要業績指標、種目別保険引受の状況を記載しております。後ほどご覧ください。

続きまして、スライド20から、ソニー損保の業績の詳細をご説明いたします。

ソニー損保 主要業績指標

(億円)	FY15.1Q	FY16.1Q	前年同期比
元受正味保険料	240	247	+2.9%
正味収入保険料	243	250	+2.8%
正味支払保険金	112	117	+4.1%
保険引受利益	18	18	+4.5%
正味損害率	53.4%	54.1%	+0.7pt
正味事業費率	26.3%	26.2%	△0.1pt
コンバインド・レシオ	79.6%	80.3%	+0.7pt

<主な増減要因>

◆ 主力の自動車保険を中心に増加。

◆ 事業費全般を適切にコントロールしたことにより、正味事業費率は横ばい。

(注) 正味損害率 = (正味支払保険金 + 損害調査費) ÷ 正味収入保険料
正味事業費率 = 保険引受に係る事業費 ÷ 正味収入保険料

	FY15.1Q	FY16.1Q	前年同期比
E.I. 損害率	58.4%	59.0%	+0.6pt
E.I. 損害率+正味事業費率	84.7%	85.2%	+0.5pt

◆ 支払備金戻入があった前年同期との比較では、E.I.損害率は若干上昇。自動車保険の事故率は低位安定して推移。

(注) E.I. 損害率 = (正味支払保険金 + 支払備金戻入額 + 損害調査費) ÷ 既経過保険料
(除く地震保険、自然災害保険)

	16.3末	16.6末	前年度末比
保有契約件数	179万件	181万件	+1万件 +0.6%
単体 ソルベンシー・マージン比率	693.5%	732.9%	+39.4pt

(注) 保有契約件数は、自動車保険とがん重点医療保険の合算値。両方で正味収入保険料の99%を占める。

ソニー損保 種目別保険引受の状況



元受正味保険料

(百万円)	FY15.1Q	FY16.1Q	増減率
火 災	89	62	△30.4%
海 上	—	—	—
傷 害	2,156	2,190	+1.6%
自 動 車	21,840	22,533	+3.2%
自 賠 責	—	—	—
合 計	24,086	24,785	+2.9%

正味収入保険料

(百万円)	FY15.1Q	FY16.1Q	増減率
火 災	13	6	△47.0%
海 上	11	△1	△116.4%
傷 害	2,245	2,281	+1.6%
自 動 車	21,793	22,468	+3.1%
自 賠 責	311	293	△5.9%
合 計	24,375	25,048	+2.8%

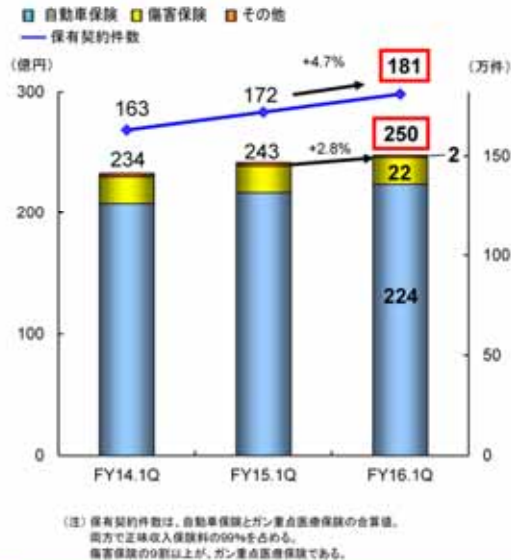
正味支払保険金

(百万円)	FY15.1Q	FY16.1Q	増減率
火 災	0	0	+398.2%
海 上	12	△12	△203.8%
傷 害	593	609	+2.7%
自 動 車	10,359	10,813	+4.4%
自 賠 責	303	324	+6.8%
合 計	11,268	11,734	+4.1%

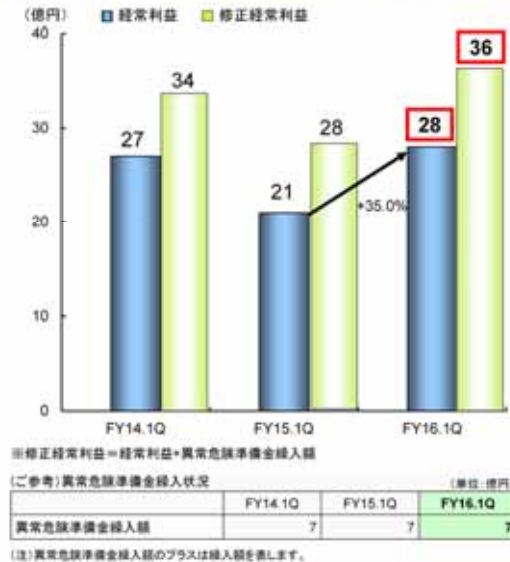
(注)「傷害」にはガン重点医療保険が含まれる。

ソニー損保の業績①

正味収入保険料と保有契約件数



経常利益と修正経常利益



(左側のグラフ)

折れ線グラフで示しております保有契約件数は、自動車保険とガン重点医療保険の合計で、前年同期末比で4.7%増加の181万件となりました。

棒グラフで示しております正味収入保険料は、自動車保険の販売が堅調だったことから、前年同期に比べ2.8%増加し、250億円となりました。

(右側のグラフ)

経常利益は、先のご説明のとおりです。

なお、修正経常利益は、経常利益から異常危険準備金繰入・戻入の影響を除いたもので、損益の実態を表すものとして社内で使用している管理指標です。

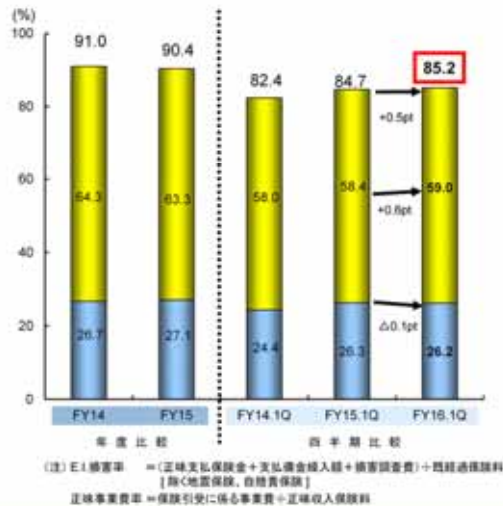
修正経常利益は、36億円となりました。

スライド21をご覧ください。

ソニー損保の業績②

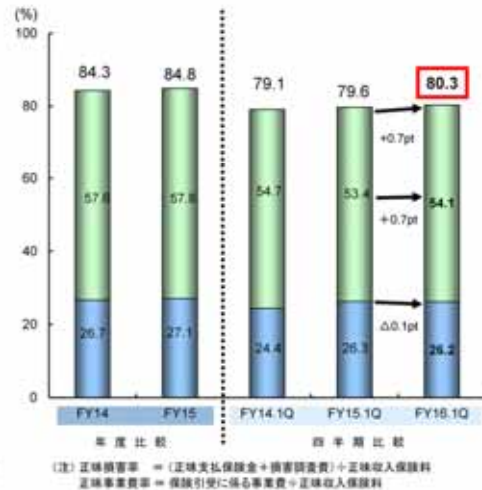
E.I.損害率 + 正味事業費率

■ E.I.損害率 ■ 正味事業費率



<参考> コンバインド・レシオ (正味損害率 + 正味事業費率)

■ 正味損害率 ■ 正味事業費率



(左側のグラフ)

E.I.損害率は、自動車保険の事故率は低位安定して推移しているものの、支払備金戻入があった前年同期との比較では、0.6ポイント増加の59.0%となりました。

正味事業費率は、事業費全般を適切にコントロールしたことにより、前年同期に比べ0.1ポイント減少の26.2%となりました。

この結果、E.I.損害率と正味事業費率を合わせた合算率は、前年同期に比べ0.5ポイント増加し、85.2%となりました。

(右側のグラフ)

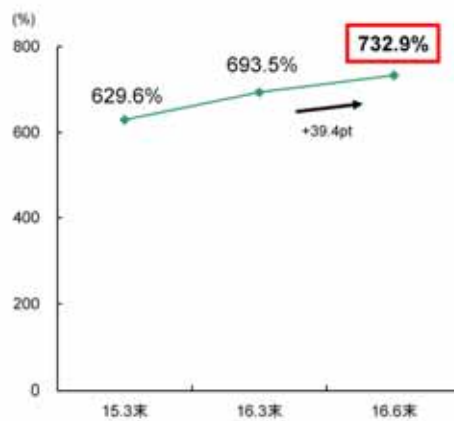
正味損害率は、前年同期に比べ0.7ポイント上昇し54.1%となりました。

正味損害率は、支払備金繰入額を反映していないなどの点で、E.I.損害率とは計算方法が異なります。

正味損害率と正味事業費率を合わせたコンバインド・レシオは、前年同期に比べ0.7ポイント上昇し、80.3%となりました。

スライド22をご覧ください。

単体ソルベンシー・マージン比率



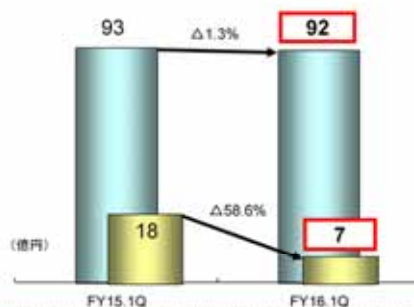
単体ソルベンシー・マージン比率は、732.9%となり、前年度末に比べ39.4ポイント増加しました。引き続き健全な水準を維持しています。

次のスライド23から、ソニー銀行の業績についてご説明いたします。

ソニー銀行 業績ハイライト(連結・単体)



□ 連結経常収益 □ 連結経常利益



<連結>

◆ 好調な住宅ローン残高の積み上がりにより貸出金利息が増加したものの、有価証券利息配当金が減少したことなどにより、経常収益は横ばい。経常利益は、主にカードローンに係る広告宣伝費など営業経費が増加したことにより、大幅に減少。

<銀行単体>

◆ 業務粗利益・業務純益ともに減少。
 ・資金運用収支は増加。有価証券利息配当金は減少したものの、貸出金利息が増加したことによる。
 ・役員取引等収支は支払保証料の増加などにより減少。
 ・その他業務収支は減少。顧客の外貨取引にともなう手数料収入が減少したことなどによる。

<連結>

(億円)	FY15.1Q	FY16.1Q	前年同期比	
連結経常収益	93	92	Δ1	Δ1.3%
連結経常利益	18	7	Δ10	Δ58.6%
親会社株主に帰属する 四半期純利益	12	5	Δ7	Δ59.5%

<銀行単体>

(億円)	FY15.1Q	FY16.1Q	前年同期比	
経常収益	86	84	Δ2	Δ2.7%
業務粗利益	53	50	Δ3	Δ6.5%
資金運用収支	39	41	+1	+4.1%
役員取引等収支	0	Δ1	Δ1	—
その他業務収支	13	10	Δ3	Δ23.2%
営業経費	35	42	+7	+20.6%
業務純益	18	7	Δ10	Δ58.7%
経常利益	18	7	Δ11	Δ61.5%
四半期純利益	12	4	Δ7	Δ60.7%

(億円)	16.3末	16.6末	前年度末比	
純資産	774	756	Δ17	Δ2.3%
その他有価証券評価差額金	33	31	Δ2	Δ6.7%
総資産	21,265	21,071	Δ194	Δ0.9%

ソニー銀行の連結経常収益は、前年同期比1.3%減少の92億円となりました。これは、好調な住宅ローン残高の積み上がりにより貸出金利息が増加したものの、有価証券利息配当金が減少したことなどによります。

連結経常利益は、主にカードローンに係る広告宣伝費など顧客層拡大のための先行投資にかかる営業経費が増加したことにより、前年同期比58.6%減少の7億円となりました。なお、カードローンの残高は好調に増加しています。

ソニー銀行単体につきましても、連結同様の要因により、減収減益となりました。

スライド24では、ソニー銀行の主要業績指標を記載しております。
 スライド25をご覧ください。

ソニー銀行 主要業績指標(単体)①



(億円)	15.6末	16.3末	16.6末	前年度末比	
預かり資産残高	20,011	20,344	20,136	△208	△1.0%
預金	18,722	19,235	19,081	△153	△0.8%
円預金	15,589	15,879	15,806	△73	△0.5%
外貨預金	3,133	3,355	3,274	△80	△2.4%
投資信託	1,289	1,109	1,054	△54	△4.9%
貸出金残高	12,260	13,441	13,956	+514	+3.8%
住宅ローン	11,112	12,371	12,893	+522	+4.2%
カードローン	50	105	132	+26	+25.5%
その他	1,097	965	930 ^{*1}	△34	△3.6%
自己資本比率 ^{*2} (国内基準)	10.56%	9.90%	9.90%	±0.00pt	

<主な増減要因>

◆ 円預金残高は、普通預金は増加したものの定期預金が減少し、微減。

◆ 外貨預金残高は、円高進行で外貨購入は進んだものの、円換算の影響により、減少。

◆ 貸出金は、借り換え需要の高まりにともなう住宅ローンの好調により、残高増加。

◆ 2015年7月に取扱いを開始した新カードローンが、好調に残高増加。

*1 うち800億円は法人向け

*2 P.27の自己資本比率(国内基準)の注記ご参照

ソニー銀行 主要業績指標(単体)②

<参考> 社内管理ベース

(億円)	FY15.1Q	FY16.1Q	前年同期比	
業務粗利益	53	50	△3	△6.5%
資金収支 ^{*1} ①	45	47	+2	+5.2%
手数料等収支 ^{*2} ②	2	△0	△3	—
その他収支 ^{*3}	5	2	△2	△46.4%
コアベース業務粗利益 (A) =①+②	48	47	△0	△1.9%
営業経費等 ③	35	42	+7	+20.2%
コアベース業務純益 = (A) - ③	12	4	△8	△64.4%

■ 社内管理ベース

損益の実態をより適切に表すよう、財務会計ベースに以下の調整を加えたもの

*1 資金収支 …… 資金運用収支 + その他業務収支に計上されている

実質的な資金運用にかかる損益(為替スワップ収益等)

*2 手数料等収支 …… 役員取引等収支 + その他業務収支に計上されている

お客さまとの外貨売買取引にかかる収益

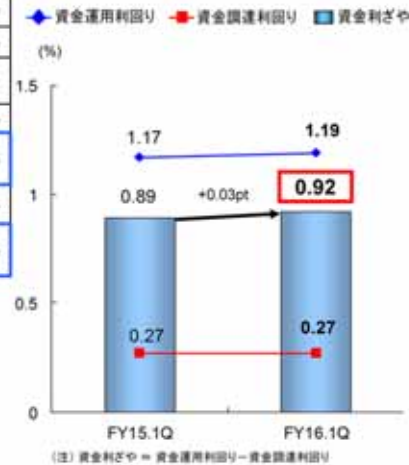
*3 その他収支 …… その他業務収支から *1 と *2 の調整分を控除したもの

(主な内容は債券関係損益およびデリバティブ関連損益)

■ コアベース

社内管理ベースの その他収支 (主な内容は債券関係損益およびデリバティブ関連損益) を除いたもので、ソニー銀行の基礎的な利益を表すもの

<参考> 資金利ざや(社内管理ベース)の推移



このスライドでは、ソニー銀行の本業における収益力をより適切にご理解いただくために、社内管理ベースの業務粗利益の内訳についてご説明いたします。

(左側のテーブル)

資金収支は、住宅ローンを好調に積み上げたことにより、前年同期比5.2%増加の47億円となりました。

手数料等収支は、顧客の外貨取引が活況だった前年同期と比べて低調だったことに加えて、支払保証料が増加したこともあり、3億円の減少となりました。

その結果、コアベース業務粗利益は、前年同期に比べ1.9%減少の47億円、コアベース業務純益は、顧客層拡大のための先行投資にかかる営業経費の増加により、64.4%減少の4億円となりました。

(右側のグラフ)

青い折れ線グラフで示しております資金運用利回りは、外貨運用にかかる利回りの上昇により、1.19%となりました。

赤い折れ線グラフで示しております資金調達利回りは、0.27%となりました。

その結果、棒グラフで示しております資金利ざやは、0.92%となりました。

スライド26をご覧ください。

ソニー銀行の業績(単体)①



業容の推移について、前年度末からの増減をご説明いたします。

(左側のグラフ)

預金残高は前年度末に比べ153億円減少し、1兆9,081億円となりました。
うち、円預金の残高は、普通預金は増加したものの定期預金が減少し、前年度末比73億円減少の1兆5,806億円となりました。
また、外貨預金の残高は、円高進行で外貨購入は進んだものの、円換算の影響により、前年度末比80億円減少の3,274億円となりました。

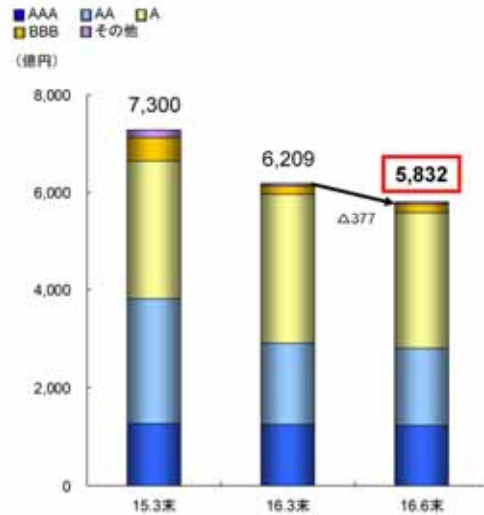
(右側のグラフ)

貸出金残高については、借り換え需要の高まりにともなう住宅ローンの好調により、前年度末に比べ514億円増加の1兆3,956億円となりました。

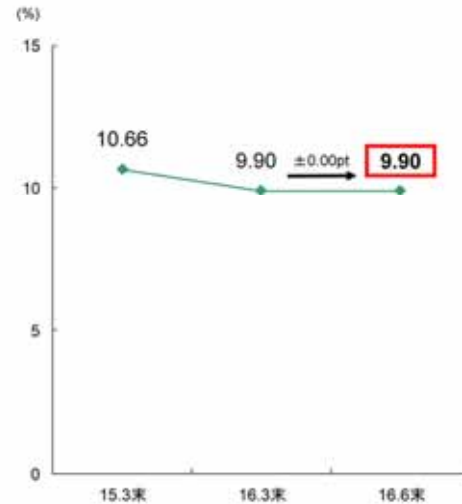
スライド27をご覧ください。

ソニー銀行の業績(単体)②

格付別の有価証券残高の推移



自己資本比率(国内基準)の推移



(注)平成18年(2006年)金融庁告示第18号「銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の状況が適当であるかどうかを判断するための基準」に基づき算出している。

(左側のグラフ)

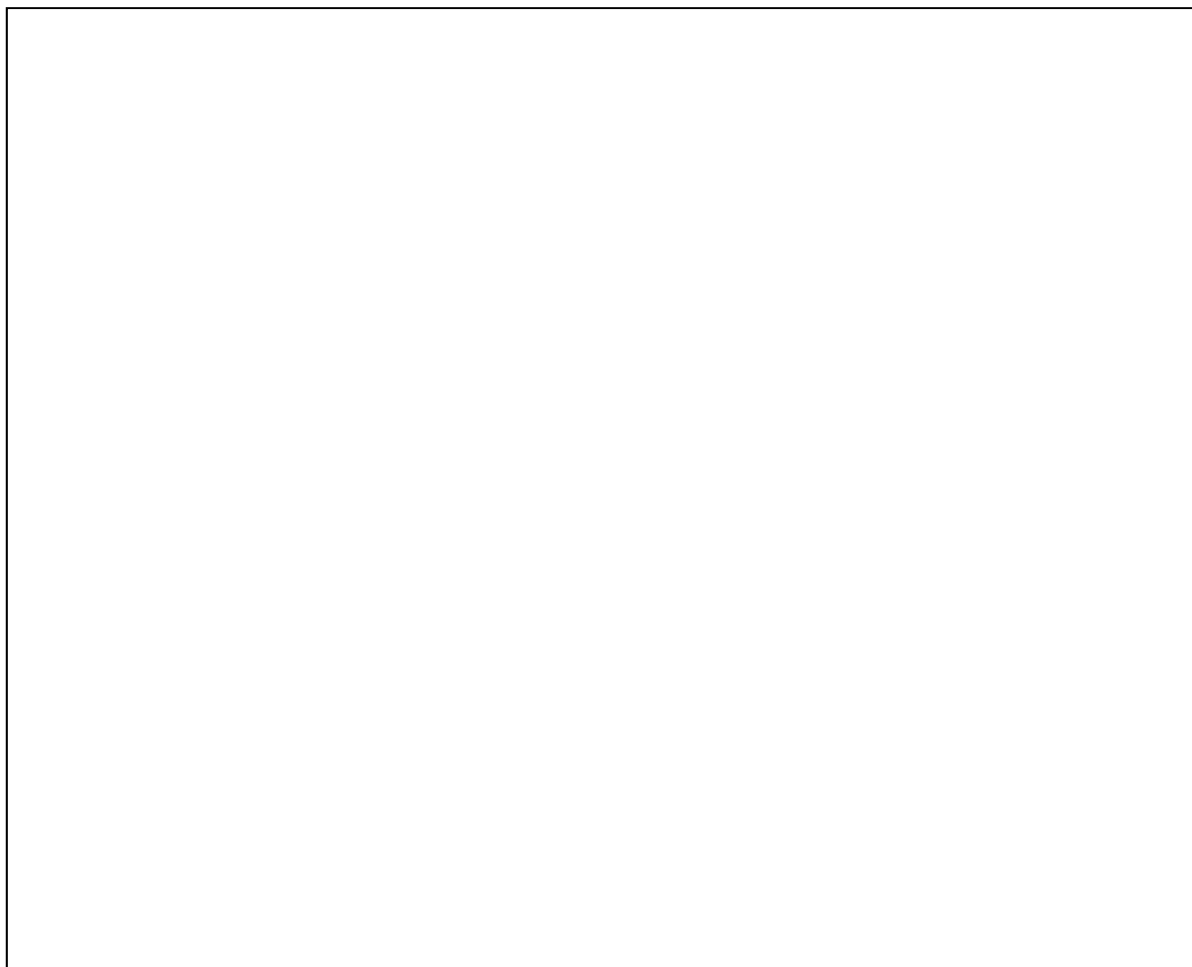
有価証券残高は、前年度末に比べ377億円減少し、5,832億円となりました。引き続き、高格付の債券を中心に運用しております。

(右側のグラフ)

自己資本比率は 前年度末比横ばいの9.90%と、引き続き健全な財務基盤を維持しております。

以上で、各社の個別業績のご説明を終わります。
続きましてスライド29をご覧ください。

2016年度連結業績予想



2016年度連結業績予想



連結業績予想については2016年4月28日に公表した数値から変更なし

(億円)	FY2015 (通期実績)	FY2016 (通期予想)	前年度比	FY16.1Q (3M実績)	進捗率
連結経常収益	13,620	14,500	+6.5%	3,266	22.5%
うち生命保険事業	12,302	13,098	+6.5%	2,920	22.3%
うち損害保険事業	969	1,016	+4.8%	260	25.6%
うち銀行事業	379	379	△0.1%	92	24.4%
連結経常利益	711	710	△0.1%	255	35.9%
うち生命保険事業	602	625	+3.8%	220	35.2%
うち損害保険事業	46	44	△6.0%	28	65.1%
うち銀行事業	59	45	△24.9%	7	17.2%
親会社株主に帰属する 当期純利益	433	460	+6.1%	176	38.4%

<各事業の経常収益・経常利益>

■生命保険事業

第1四半期の経常収益は、保険料収入の減少により、期初の想定を下回ったものの、経常利益は、有価証券のヘッジに係る評価益、保険金支払額の減少、新契約獲得にともなう変動保険の最低保証に係る責任準備金繰入額の減少により、期初の想定を上回りました。

通期見通しについては、第2四半期以降の市場環境、保険金支払の動向などを勘案し、据え置きます。

■損害保険事業

第1四半期の経常収益はほぼ想定通りに推移しました。経常利益は、有価証券売却益の増加などにより期初想定を上回りました。

通期見通しについては、据え置きます。

■銀行事業

第1四半期の実績は、マイナス金利導入の収益に対する影響や、中期的な顧客層拡大のための施策に係る先行投資費用の進捗に鑑み、ほぼ想定通りに推移しており、通期見通しを据え置きます。

2016年度 連結業績予想は2016年4月28日に公表した数値から変更してありません。

スライド31をご覧ください。

ソニー生命の2016年6月末MCEV およびESR

2016年3月末(再評価後)および2016年6月末の計算の妥当性については第三者の検証を受けていないことに十分ご注意ください。
また、2016年6月末については、一部簡易な計算を実施しております。

※当パートにおいては、数値、比率ともに表示単位未満は四捨五入で表示しています。

ソニー生命のMCEV・ESR ～UFRの採用～



以下の点を踏まえ、今年度より、MCEVとESRに用いるリスクフリーレートの超長期金利の補外方法を、終局金利(Ultimate Forward Rate, 以下「UFR」)を用いた方法に変更します。

◆資本十分性を表すESRの評価は、国際的な資本規制の検討状況を反映することが適当と判断しました。ただし、評価手法が確立されていない現段階では、市場整合性を考慮し、補外開始年度を40年に設定しました。

◆MCEVは、会社の重要指標であるESRと整合的であることが、現時点では望ましいと判断しました。その際、MCEV原則への準拠(40年目までの金利には信頼性のある市場データを使用することで、資産と負債評価の整合性を確保します)や、欧州・国内の生命保険会社の開示状況などを考慮しました。

* 40年目までの金利は、市場から取得可能な日本国債レートを使用します。40年超の金利は、60年目のフォワードレートがUFR(3.5%)に収束するように、Smith-Wilson法により補外しています(従来は40年目のフォワードレートを一定として補外していました)。これにより、2016年3月末の市場データ(40年金利0.63%)に対し、市場データの無い60年金利を1.23%、80年金利を1.47%で計算していることとなります。詳細は参考情報P.51をご覧ください。

上記変更に伴い、2016年3月末の主要数値について、再評価した金額を開示します。

2016年度より、ソニー生命のMCEVとESRに用いるリスクフリーレートの超長期金利の補外方法を、終局金利(Ultimate Forward Rate, 以下「UFR」)を用いた方法に変更致します。

変更理由は次の通りです。

資本十分性を表すESRの評価は、国際的な資本規制の検討状況を反映することが適当と判断しました。ただし、評価手法が確立されていない現段階では、市場整合性を考慮し、補外開始年度を40年に設定しています。

また、MCEVは、会社の重要指標であるESRと整合的であることが、現時点では望ましいと判断しました。その際、MCEV原則への準拠や、欧州・国内の生命保険会社の開示状況などを考慮しました。

なお、40年目までの金利は、市場から取得可能な日本国債レートを使用し、40年超の金利は、60年目のフォワードレートがUFR(3.5%)に収束するように補外しています。

これにより、2016年3月末の市場データ 40年金利0.63%に対し、市場データの無い60年金利を1.23%、80年金利を1.47%としていることとなります。詳細は参考情報をご覧ください。

この変更にともない、2016年3月末の主要数値について、UFRを採用した手法により再評価した金額を開示します。

ソニー生命の2016年3月末MCEV(再評価後)



	16.3末 (再評価前)	16.3末 (再評価後)
(億円)		
MCEV	10,637	13,301
修正純資産	20,744	20,744
保有契約価値	△10,107	△7,444

	FY15.4Q (3M) (再評価前)	FY15.4Q (3M) (再評価後)
(億円)		
新契約価値	△17	39
新契約マージン	△0.5%	1.2%

*修正純資産および保有契約価値の詳細については、参考情報P.47をご覧ください。

再評価後のソニー生命の2016年3月末MCEVはご覧のとおりです。
2016年3月末の再評価後のMCEVは1兆3,301億円となりました。
修正純資産および保有契約価値の詳細については、参考情報をご覧ください。

FY15.4Q (3M) の新契約価値は39億円、新契約マージンは1.2%となりました。

次のスライド33をご覧ください。

ソニー生命の2016年3月末ESR(再評価後)



(税引後)

(億円)	16.3末 (再評価前)	16.3末 (再評価後)
保険リスク*	10,976	9,893
市場関連リスク	2,563	3,242
うち金利リスク**	1,836	2,552
オペレーショナルリスク	314	314
カウンターパーティリスク	20	20
分散効果	△3,681	△3,744
経済価値ベースのリスク量	10,192	9,724

(*) Life区分、Health区分間での分散効果考慮前のリスク量です。
 (**) 市場関連リスク内での分散効果考慮前のリスク量です。

(億円)	16.3末 (再評価前)	16.3末 (再評価後)
MCEV+フリクショナル・コスト***	10,637	13,665
ESR	104%	141%

(***) 再評価前については、MCEVとしています。

再評価後のソニー生命の2016年3月末経済価値ベースのリスク量およびESRはご覧のとおりです。

経済価値ベースのリスク量は9,724億円となりました。

なお、今回の変更とあわせ、ESRの分子は、MCEVとフリクショナル・コストの合計に変更しています。

これらを適用した2016年3月末のESRは141%となります。

次のスライド34をご覧ください。

<MCEVへのセンシティブティ>

(億円)

前提条件	前提条件等の変化	MCEV	変化額	変化率
ベースケース	なし	13,301	—	—
金利	50bp 低下	11,704	△1,597	△12%
	50bp 上昇	13,987	686	5%

<新契約価値へのセンシティブティ>

(億円)

前提条件	前提条件等の変化	新契約価値 < FY15.4Q (3M) >	変化額	変化率
ベースケース	なし	39	—	—
金利	50bp 低下	△77	△115	△298%
	50bp 上昇	124	85	221%

(注) 金利センシティブティにおいては、補外開始年度までのイールドカーブを50bp変化させ、UFRは変えずに補外しています。

(注) MCEVへのセンシティブティにおいては、UFRの採用は修正純資産の変化額への影響はありません。

(注) 新契約価値の金利センシティブティにおいては、対象契約はFY15.4Q(3M)としています。

5/23に開示したレポートと対象契約が異なることにご留意ください。

2016年3月末の再評価後のセンシティブティは記載のとおりです。
再評価の影響の大きい金利センシティブティのみを開示しています。

MCEVへの金利センシティブティは、50bp低下による変化額は△1,597億円、変化率は△12%、50bp上昇による変化額は686億円、変化率は5%となります。

次のスライドより、2016年6月末のMCEVについてご説明いたします。

ソニー生命の2016年6月末MCEV



(億円)	16.3末	16.6末	増減
MCEV	13,301	10,764	△2,537
修正純資産	20,744	26,718	5,974
保有契約価値	△7,444	△15,955	△8,511

(億円)	FY15.4Q (3M)	FY16.1Q (3M)
新契約価値	39	△2
新契約マージン	1.2%	△0.0%

(注) 2016年6月末のMCEVの計算は、2016年3月末の前提条件から経済前提と解約・失効率をアップデート。

(注) 2016年第1四半期の新契約価値は、各月の新契約を各月末の経済前提で評価。2015年度第4四半期の新契約価値は、3カ月間の新契約を四半期末の経済前提で評価。

◆ MCEV増減要因

- ・2016年3月末に比べ、円金利の大幅な低下などにより、2,537億円減少。

◆ 新契約価値・新契約マージン

- ・2016年度より、新契約価値の計算方法を「四半期ごとの積上」から「月次ごとの積上」に変更。
- ・新契約価値は、FY16.1Q(3M)で△2億円。新契約マージンは△0.0%、FY15.4Q(3M)に比べ、1.2ポイント低下。

*日本国債レートの推移については、参考情報P.50をご覧ください。

ソニー生命の2016年6月末のMCEVは、円金利の大幅な低下などにより、前年度末に比べて2,537億円減少し、1兆764億円となりました。

新契約価値・新契約マージンの計算方法は、2016年度より、「四半期ごとの積上」から「月次ごとの積上」に変更しています。

新契約価値はFY16.1Q(3M)で△2億円、新契約マージンは△0.0%となりました。

FY16.1Q(3M)は、商品改定や保障性商品へのシフトによる収益改善効果はあったものの、円金利の大幅な低下により、新契約価値・新契約マージンが低下しました。

今後も、機動的な対応により収益改善を図り、低金利下においてもMCEVの成長に取り組んでまいります。

次のスライドをご覧ください。

ソニー生命の2016年6月末ESR

(税引後)		
(億円)	16.3末	16.6末
保険リスク*	9,893	12,276
市場関連リスク	3,242	2,950
うち金利リスク**	2,552	2,180
オペレーショナルリスク	314	315
カウンターパーティリスク	20	22
分散効果	△3,744	△4,145
経済価値ベースのリスク量	9,724	11,418

(*) Life区分、Health区分での分散効果考慮前のリスク量です。

(**) 市場関連リスク内での分散効果考慮前のリスク量です。

(億円)	16.3末	16.6末
MCEV+フリクショナル・コスト	13,665	10,855
ESR	141%	95%

(注) 経済価値ベースのリスク量とは、ソニー生命が保有する各種リスク(保険リスク、市場関連リスク等)を、市場整合的な方法で総合的に評価したリスク総量です。

(注) 経済価値ベースのリスク量の測定においては、1年VaR99.5%水準とし、EUソルベンシーⅡの標準的手法を参考にした内部モデルを採用しています。

(注) ESRは「(MCEV+フリクショナル・コスト)/ 経済価値ベースのリスク量」です。

経済価値ベースのリスク量は、円金利の大幅な低下による保険リスクの増加などにより、前年度末に比べて1,694億円増加し、1兆1,418億円となりました。

ESRは、円金利の大幅な低下により、前年度末から大きく低下し、95%となりました。

次のスライドで、超低金利環境下における対応と健全性の考え方についてご説明いたします。

<超低金利環境下における対応>

➤ 商品戦略&販売戦略:

- ・ 5月に貯蓄性商品の一部販売停止
- ・ 10月に変額保険(終身型)、有期払込終身保険、生前給付終身保険(生活保障型)、生前給付保険(終身型)などの料率改定および積立利率変動型終身保険の販売停止を実施予定
- ・ 米ドル建保険、定期保険の提案力強化

➤ 資産運用方針:

- ・ ALMの考え方に基づき、負債特性に見合った資産への投資を維持しつつ、運用手段の多様化を推進
- ・ 超長期の財投機関債、社債への投資を拡大
- ・ 超長期債による運用を継続するも、マイナス金利商品には投資せず

<健全性の考え方>

- 2016年6月末のESRは100%を下回ったものの、7月末においては、110%^(注)程度に回復。上述の通り、商品改定や販売力強化を進め、FY16下期以降の新契約価値を積み増すことにより、足元のESRは回復可能な水準であり、現時点において、資本増強の必要はないと認識。

(注) 2016年7月末のESRについては、2016年6月末の計算値に対し、2016年7月末の金利を適用した試算値です。

2016年5月に貯蓄性商品の一部販売停止を実施しましたが、さらに、10月には変額保険(終身型)をはじめとする終身保険の料率改定、積立利率変動型終身保険の販売停止を実施する予定です。

また、引き続き、米ドル建保険・定期保険の提案力を強化し、着実な収益性改善に取り組んでまいります。

2016年6月末のESRは100%を下回りました。しかしながら、商品改定や販売力強化を進め、FY16下期以降の新契約価値を積み増すことにより、足元のESRは回復可能な水準であり、現時点において、資本増強の必要はないと認識しております。

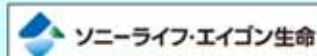
以上で説明を終了いたします。
ありがとうございました。

参考情報

その他トピックス①

ソニーライフ・エイゴン生命の概要

営業開始: 2009年12月1日
 資本金: 140億円
 株主: ソニー生命 50%、エイゴン・インターナショナルB.V. 50%
 取扱商品: 変額個人年金保険
 販売チャネル: ライフプランナー、および銀行等(計26社) *2016年8月10日現在



SA Reinsurance の概要

設立日: 2009年10月29日
 資本金: 134億円
 株主: ソニー生命 50%、エイゴン・インターナショナルB.V. 50%
 事業内容: 再保険業

注) ソニーライフ・エイゴン生命とSA Reinsuranceは、ソニー生命とエイゴン・インターナショナルの各半出資(50:50)による合弁会社であり、特分法適用関連会社です。

ソニー銀行における、ソニー生命による住宅ローンの取扱い状況

- 2016年6月末の住宅ローン残高の20%
 2016年度第1四半期の住宅ローン新規融資実行金額の17%
 ※銀行代理業務取扱い開始: 2008年1月



ソニー損保における、ソニー生命による自動車保険取扱い状況

- 2016年度の新規自動車保険契約件数の4%
 ※自動車保険取扱い開始: 2001年5月



その他トピックス②

＜2016年度第1四半期以降の主な取組み＞

2016年 4月1日	生保	秋田県と山口県に営業拠点を新設
2016年 4月1日	介護	ソニー・ライフケアグループ初の新設介護付有料老人ホーム「ソナーレ 相師ヶ谷大蔵」を東京都世田谷区に開設
2016年 4月7日	銀行	スマートフォン向け「Sony Bank WALLETアプリ」の提供を開始
2016年 5月2日	生保	【新商品】『低解約返戻金型平準定期保険(障害介護型)』・『無解約返戻金型平準定期保険(障害介護型)』の発売
2016年 5月12日	介護	介護付有料老人ホーム「ソナーレ」シリーズ2棟目を埼玉県さいたま市浦和区に新設することを発表 ※2017年春季開設予定
2016年 5月18日	生保	台北駐在員事務所を閉鎖
2016年 5月19日	生保	法人契約のお客さま向けに新サービス(健康支援・経営者支援・福利厚生支援)を開始したことを発表
2016年 6月23日	当社	代表取締役社長の交代
2016年 7月1日	生保	シンガポール駐在員事務所を開設
2016年 7月4日	当社・生保	本社オフィスを東京都千代田区大手町に移転

ソニー生命の保有する有価証券(一般勘定)



有価証券の時価情報

売買目的有価証券以外の有価証券のうち、時価のあるもの

(億円)

区 分	15.3末			16.3末			16.6末		
	帳簿価額	時価	差損益	帳簿価額	時価	差損益	帳簿価額	時価	差損益
満期保有目的の債券	48,787	57,182	8,394	53,839	74,101	20,262	54,537	82,576	28,039
責任準備金対応債券	—	—	—	2,512	2,925	413	2,651	3,320	669
その他の有価証券	10,078	11,766	1,688	8,879	10,916	2,036	8,796	11,038	2,242
公社債	9,746	11,201	1,455	8,543	10,403	1,860	8,538	10,661	2,122
株式	134	294	160	136	256	120	136	239	103
外国証券	194	264	69	198	252	54	119	134	14
その他の証券	3	6	3	1	3	1	1	3	1
合 計	58,866	68,949	10,083	65,231	87,943	22,711	65,985	96,936	30,951

(注1) 本表には、金銭の信託のうち売買目的有価証券以外のものを含んでいます。

(注2) 上表の満期保有目的の債券には、デリバティブを組み込んだ金融商品(元本確保型クーポン付経平均変動30年債)が含まれております。各期における金額は以下の通りです。

2015年3月末時点 帳簿価額442億円 時価575億円 差益132億円
 2016年3月末時点 該当ありません。
 2016年6月末時点 該当ありません。

売買目的有価証券の評価損益

(億円)

15.3末		16.3末		16.6末	
BS計上額	PL評価損益	BS計上額	PL評価損益	BS計上額	PL評価損益
10	0	22	1	19	△2

(注) 本表には、金銭の信託等の売買目的有価証券を含んでいます。

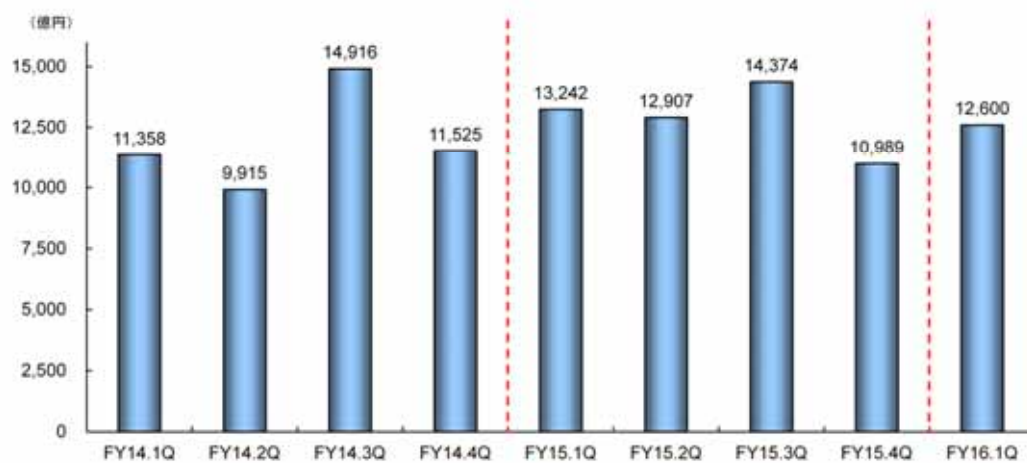
ソニー生命の利配収入内訳

(百万円)

	FY15.1Q	FY16.1Q	前年同期比
現預金	0	0	△ 94.1%
公社債	27,811	29,862	+ 7.4%
株式	79	62	△ 20.4%
外国証券	2,334	1,698	△ 27.2%
その他の証券	1,036	25	△ 97.6%
貸付	1,512	1,572	+ 3.9%
不動産	2,570	2,703	+ 5.2%
その他	18	23	+ 25.7%
合計	35,363	35,948	+ 1.7%

ソニー生命の新契約高の四半期推移

新契約高の四半期(3カ月)ごとの推移

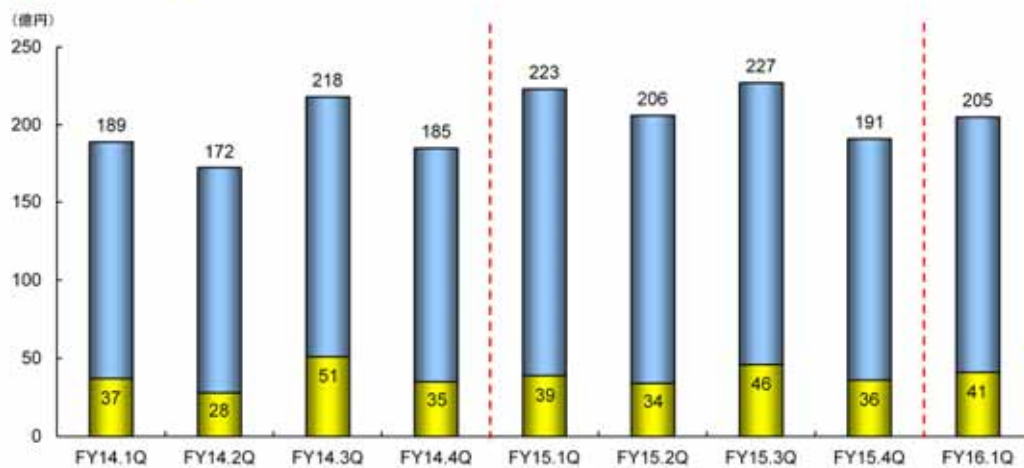


ソニー生命の新契約年換算保険料の四半期推移



新契約年換算保険料の四半期(3カ月)ごとの推移

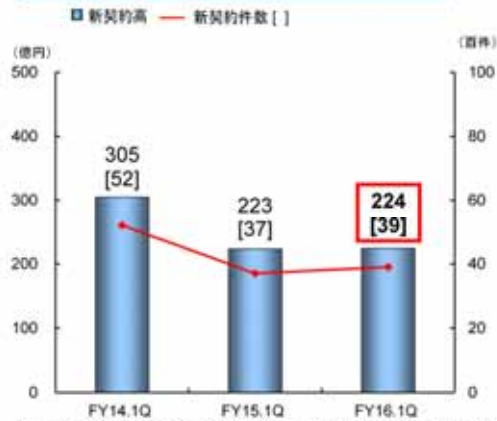
■ 新契約年換算保険料 ■ うち、第三分野



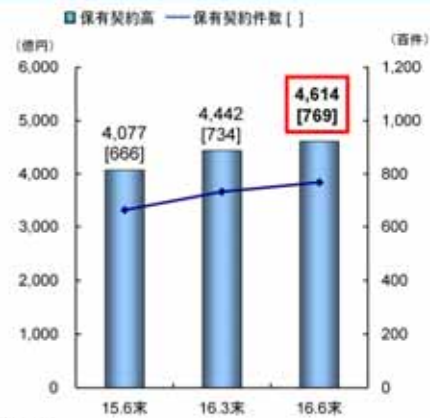
年金事業の業績

(ソニーライフ・エイゴン生命の新契約高及び保有契約高)

新契約高・件数



保有契約高・件数



(ソニーライフ・エイゴン生命およびSA Reinsuranceの四半期純利益(△損失))

(億円)	FY15.1Q	FY16.1Q	前年同期差
ソニーライフ・エイゴン生命	△ 2	△ 9	△ 6
SA Reinsurance	△ 2	△ 18	△ 16

(注) ソニーライフ・エイゴン生命とSA Reinsuranceは、ソニー生命とエイゴン・インターナショナルの折半出資(50:50)による合弁会社であり、SFHの持分法適用関連会社です。
SA Reinsuranceの業績数値は、米国会計原則に準拠しています。SFHの親会社株主に帰属する四半期純利益には上記の金額に対する持分相当(50%)が反映されています。

ソニー生命のMCEV中期目標(再評価後)



ソニー生命のMCEV中期目標は、UFR採用にともなう再評価により、以下のとおりとなります。

	FY15		FY18
MCEV (再評価前)	1.0兆円	ROEV4-5%	1.1兆円超
MCEV (再評価後)	1.3兆円	ROEV4-5%	1.4兆円超

➤ FY18のソニー生命のROEV および SFHの連結修正ROEの中期目標は、再評価後も4～5%となり、再評価前からの変更はありません。

(注) 中期計画の計算前提は2016年3月末の金利水準。

(注) ROEV、連結修正ROEの計算式は2016年6月1日開示の経営方針説明会のプレゼンテーション資料を参照。

ソニー生命の2016年3月末MCEV関連数値(再評価後)

(億円)	16.3末 (再評価前)	16.3末 (再評価後)
保有契約価値	△10,107	△7,444
確実性等価利益現価	△3,931	△1,699
オプションと保証の時間価値	△1,276	△1,373
フリクショナル・コスト	△556	△364
ヘッジ不能リスクに係る費用	△4,344	△4,007

(億円)	16.3末 (再評価前)	16.3末 (再評価後)
修正純資産	20,744	20,744
フリー・サープラス	1,001	3,940
必要資本	19,743	16,804

経済価値ベースのリスクの測定方法①

■ 市場関連リスク (注1)

	ソニー生命	(参考) EUソルベンシー II 実施基準 (Delegated Regulation)
金利リスク 右のShockを与えた時の、 経済価値純資産の変動 以下同じ。	年限と通貨ごとに異なる金利の変化率を設定。 但し、円金利は主成分分析を用いて、3つの変動要因。 (パラレルシフト、カーブのフラット化、曲がり)に分解して計測。 (例) 円30年における、それぞれの変化率は、△33%、△28%、△8%。	1年から20年まで年限ごとに異なる金利の変化率を設定。 20年以降90年までは、20年の変化率△29%と90年の変化 率△20%を線形補間した変化率を設定。
株式リスク	上場株式 45% その他証券 70%	Global 39% Others 49% (注2)
不動産投資リスク	不動産 25%	同左
信用リスク	信用リスク=(時価)×(格付毎のリスク係数)×(デュレーション) 尚、デュレーションには格付けにより、キャップとフロアーがある。 (例) A格 リスク係数(1.4%)、キャップ(23)、フロアー(1)	信用リスク=(時価)×(格付・デュレーション毎のリスク係数) (例) A格、デュレーション(Dur):5~10年 リスク係数=7.0%+0.7%×(Dur-5)
為替リスク	不利な方向へ35%変化。	不利な方向へ25%変化。

(注1) 2016年6月末現在、主要な項目。

(注2) symmetric adjustment (過去一定期間の株価インデックスの平均値を基準として±10%以内で加える調整)が適用される。

経済価値ベースのリスクの測定方法②

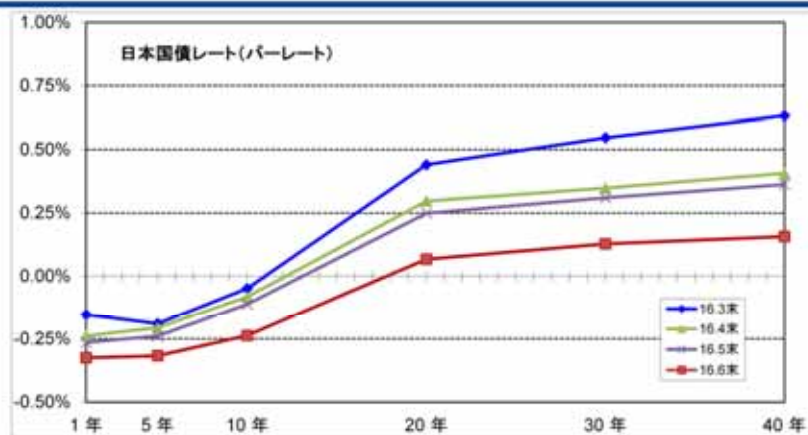
■ 保険リスク (注1)

	ソニー生命	(参考) EUソルベンシー II 実施基準 (Delegated Regulation)
死亡リスク	各経過年の死亡率が15%増加。	同左
生存リスク	各経過年の死亡率が20%減少。	同左
解約リスク	・各経過年の解約率が50%増加。 ・各経過年の解約率が50%減少。 ・解約返戻金が最良推定負債を上回る契約の30%が、直ちに解約。 これらの最大値(注2)。	・Life区分50%増加、Health区分50%増加 ・Life区分50%減少、Health区分50%減少 ・解約返戻金が最良推定負債を上回る契約の40% (団体年金等は70%)が、直ちに解約。 これらの最大値。
事業費リスク	各経過年の事業費が10%増加。 インフレ率が1%上昇。	同左
疾病リスク	発生率が初年度35%増加、次年度以降25%増加。	発生率が初年度35%増加、次年度以降25%増加。 回復率が20%減少。

(注1) 2016年6月末現在、主要な項目。

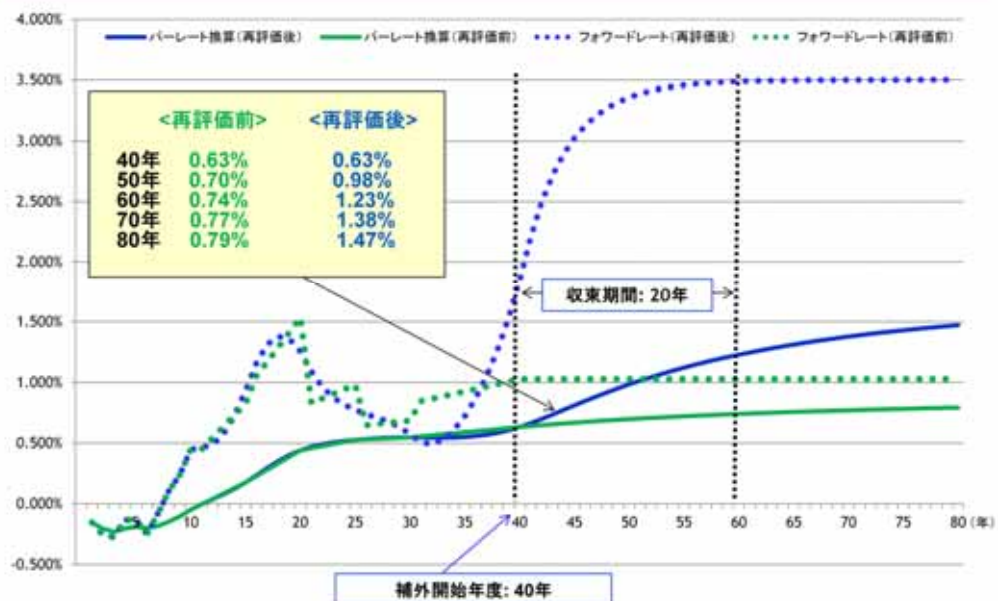
(注2) ソニー生命は個別契約毎の大小比較を実施。

日本国債レートの推移



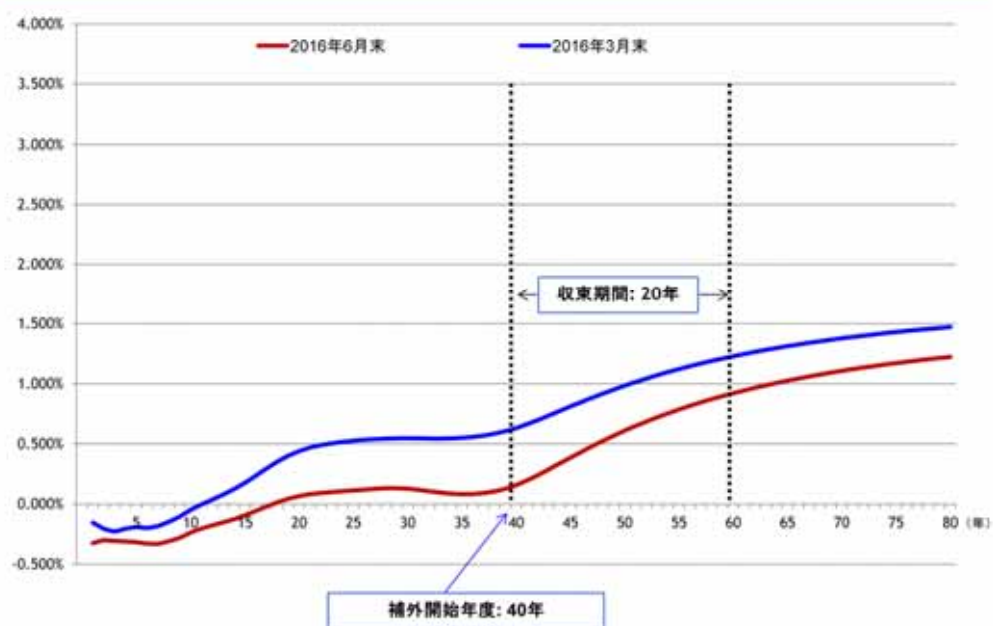
	16.3末	16.4末	16.5末	16.6末	16.3末 →16.6末
1年	-0.15%	-0.24%	-0.27%	-0.33%	-0.17%
5年	-0.19%	-0.21%	-0.24%	-0.32%	-0.13%
10年	-0.05%	-0.08%	-0.11%	-0.24%	-0.19%
20年	0.44%	0.30%	0.25%	0.07%	-0.37%
30年	0.55%	0.35%	0.31%	0.13%	-0.42%
40年	0.63%	0.41%	0.36%	0.16%	-0.48%

2016年3月末リスクフリーレート(日本円)



米ドルについても、60年目のフォワードレートがUFR(3.5%)に収束するように、同様の手法で30年超の金利を補外しています。

リスクフリーレート(日本円、パーセント換算)の推移





お問い合わせ先：
ソニーフィナンシャルホールディングス株式会社
TEL:03-5290-6500(代表)